中一国語
坊っちゃん　第三回

講師：羽場 雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・坊っちゃん

◆　夏目漱石

東京帝国大学（今の東京大学）英文科卒業後、東京高等師範学校、松山中学、第五高等学校などの教師生活を経て、イギリスに留学する。

〈代表作〉

『吾輩は猫である』…第一作

前期三部作…愛とエゴイズムの追求

『三四郎』
『それから』
『門』

後期三部作…修善寺の大患後、心理主義的・実存主義的関心が深まった作品

『彼岸過迄』
『行人』
『こころ』

『道草』…自伝的小説。

『明暗』（大正五年・未完）…絶筆

おれが下宿へ帰ったのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもしと聞いた。お婆さん、東京へ行って奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗って浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思ったが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之辞職の上東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛にして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆である。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であった。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかったなあ」と二人は大きに笑った。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清の事を話すのを忘れていた。――おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぽたぽたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋で街鉄の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくっても至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。

【第一問】

夏目漱石について説明した次の文章の空欄(らん)に当てはまる言葉を、後の語群から選び、記号で答えなさい。

夏目漱石は、東京帝国大学英文科講師となるが、神経衰弱(すい)を再発させた漱石は高浜虚子に勧(すす)められ、第一作の小説「（　1　）」（明治38年）を発表。その後、松山中学での経験をもとに書いた「（　2　）」、「草枕(まくら)」、さらには前期三部作（「（　3　）」「それから」「門」）を執筆(しっぴつ)する。

［語群］

ア、ドイツ　　イ、イギリス
ウ、坊っちゃん　　エ、吾輩は猫である
オ、行人　　カ、三四郎
キ、明暗　　ク、修善寺の大患

1＝　　2＝　　3＝

【第二問】

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、①学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やあい。とはやしたからである。人に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと言ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

（中略）

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあったもんだ。兄は、実業家にな

るとか言って、しきりに英語を勉強していた。（中略）ある時将棋をさしたらひきょうな待ち駒をして、人が困るとうれしそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手にあった飛車を眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている②清という下女が、泣きながらおやじに謝まって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえってこの清という下女に気の毒であった。この下女はもと由緒のあるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だからばあさんである。このばあさんがどういう因縁か、俺を非常に可愛がってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前にあいそをつかした――おやじも年中持て余している――町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする――この俺を無暗に珍重してくれた。俺は到底人に

好かれるたちでないとあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたはまっすぐでよいご気性だ」と褒めることがときどきあった。しかし俺には清の言う意味が分からなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思った。清がこんな事を言うたびに俺はお世辞は嫌いだと答えるのが常であった。するとばあさんはそれだからいいご気性ですと言っては、嬉しそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造して誇ってるように見える。少々気味が悪かった。

（中略）

清の事を話すのを忘れていた。――俺が東京へ着いて下宿へも行かず、革鞄を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をぽたぽたと落した。俺もあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋(しゅうせん)での街鉄(がいてつ)の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関(げんかん)付きの家でなくっても至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎(はいえん)に罹(かか)って死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋(う)めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向(こびなた)の養源寺にある。

問一　傍線部①「学校の二階から飛び降りて」とあるが、「俺」がこのような行動をとったのは、彼のどのような性格によるものか。文章中から三文字で抜きだしなさい。

問二　傍線部②「清」について。この文章からは「清」の「俺」に対するどのような態度が読み取れますか。簡単に答えなさい。